

ねばならぬ。又た如何なるものが、我等を謙らし  
 むる機会を興へても、之れを有がたがらねばなら  
 ぬ。我等を踏付けた人に對して、殊に我等の  
 厭々ながら其の虐待を忍んで居る事を、其の人が  
 知つて居ると思へば、尙ほ更に有がたがるべきも  
 のである。併しながら厭々であるならば、夫れを  
 外面に表はしてはならぬ。

是まで述べて來た事が、幾ら本統であつても、

悪魔の奸策や、我等の性質の腐敗や、愚暗に負け  
 て、彼の傲慢の思が、不斷我等の心を亂し、之れ  
 に感じさゝれる事があるならば、其の時こそ謙る  
 に好き機会であつて、經驗に依り我等が靈生と己  
 れを知るの道とに進歩した事の少いのを悟るを以  
 て、尙ほ深く謙らねばならぬ。其の進歩した事の  
 少い證據は、我等の傲慢に根差して居る諸の厄介を  
 逃れ得ぬ事に在り、嗚呼、之れは毒より良薬、傷

より健康を求むる道である。

第卅三章 邪慾に克ち、新に徳を求むるに有

益なる數箇條の意見

最早自己に克ち、徳を以て靈魂を飾る爲め、な  
すべき事に就て、多く語つたが、尙ほ話したい意  
見がある。

第一我等が徳を求むる爲めに働く時は、一週間  
の日を精密に分けて、今日は此の徳、明日は彼の

徳、云々と云ふやうに修業する事を勧める人があ  
るけれども、之れを信じてはならぬ。

本統の戦方は、先づ第一我等に、最早大害を來  
し、今も現に我等を攻撃して、害を來しつゝある  
邪慾に打て掛り又た之れに反對なる徳を求むる爲  
めに働き、出来る丈け完全に、此の修業に身を委  
ぬる事である。

一度此等の徳を求め得たならば、他の徳は容易

く伴て来る又た機會があつて、之れに達するには  
僅の勵と些の時とで足るであらう。總て徳は皆な  
相互に繋がれてあるから、一の徳を完全に求め得  
た以上は、他の徳が皆な早く心の門に入り来るも  
のである。

第二は徳を求むるが爲めに、何日、何週間、何  
年間と、之れに掛るべき時を、定めては宜くない  
何時も未だ熟練して居らぬ新兵の如くにして、完

徳に達せんとの目的を以て、練習して戦はねばな  
らぬ。

故に片時も立留つてはならぬ、徳の道に立留る  
のは、息を吐くのもなければ、力を附けるので  
もなく、却て後戻りして、以前よりも弱く成る事  
である。

立留るのは完全に徳に達したと云ふ考へなので  
再び徳の業を行ふ爲めに來るべき機會をも、些細

な落度をも構はぬ徴である。

故に迅速に、熱心に、巧妙にして、徳を行ふ僅な機會をも、失はぬやうに爲ねばならぬ。

總て徳に導く機會、殊に最も打勝ちがたき機會を愛せねばならぬ。困難に打勝つ爲めに行ふ所の業は、習慣を早く生ぜしめて、之れに尙ほ深き根を差させるものである。故に此等の機會を與ふる人々を愛せねばならぬ。唯だ邪嬖の罪の誘惑に至

らしむる機會のみは、出来る丈け早く、又た巧妙に之れを防がねばならぬ。

第三は健康を害し得る様な徳の業、假令は己を懲すが爲めに身を鞭ち、毛衣を着け、斷食を爲し眼を減じ、長く黙想する事、及び之れに類する他の業に至つては、用心して之れを適度に用ふる事を勤む、後から述べる積りであるが、此等の徳を求むるには、其の働きを少しづつ、又た漸次に爲

べき事である。

心の中に止る徳、假令ば神を愛する事、世を輕  
ずる事、自己を棄る事、邪慾罪惡を憎み嫌ふ事、  
堪忍、柔和、衆人を愛し、敵をも愛する事、及び  
之れに類する徳に至つては、之れを求むるに、少  
しづゝ働き、漸次にして其の完全に進むに限らず  
出来る丈け完全に此等の凡ての業を行ふやうに、  
力めねばならぬ。

第四我等の思念と志望と心とを盡くして、現に

戦ひつゝある慾に打勝ち、之れと反對なる徳を求  
むるに、身を委ねばならぬ。我等に取りては、  
之れが全世界、天地、萬寶の籠れるものにして、  
恒に唯だ神の聖意に適ふ目的を以てのみ、之れを  
爲ねばならぬ。

飲食するにも、斷食するにも、疲れる時でも、  
休む時でも、睡ても、醒ても、宅に居る時でも、

外に在る時でも、敬虔の勤に従事するにも、日々  
の手仕事に取掛るにも、萬事我等の現に戦ひつゝ  
ある慾に打勝ち、之れと反對なる徳を求むる目的  
を以てせねばならぬ。

第五は世間の快樂、又は五官の樂に成る便利を  
嫌ふやうにせねばならぬ。斯くすれば快樂に根差  
て居る惡徳は、我等を攻撃するに、其の力が極め  
て弱いであらう。一度自己を憎む念を以て、其の

根を切抜いたならば、惡徳に速に其の力と勢と  
を失ふであらう。

若し種々の缺點や、惡き傾向があるのに、此等  
は靈魂に死を來たす事なく、輕き落度に導くに過  
ぎぬとの口實を以て、夫れを措きながら、故ら一  
の缺點、一の自然の傾向と戦ふ積りならば、斷言  
する、夫んな了簡で戦ふのは、寔に困難で、又た  
危険で、勝利は覺束なく、極めて稀である。神が

聖書に示したまへる左の金言を忘れてはならぬ。

「其の命を愛するものは、之れを失はん、現世に於て其の命を憎むものは、之れを保ちて永生に至るべし」(約翰傳十二章二十五節)

「兄弟達よ、我等は肉に債ありて肉に従ふて生活すべきものにあらず、汝等若し肉に従ふて生活せば死なん、若し(聖)靈に由て肉の業を殺さば活くべし」(羅馬書八章二十二節)

第六は注意まで、云ふのであるが、總告白を善く爲る事は大層利益に成る、或は必要であるかも知れぬ、之れは凡ての恩恵と、凡ての勝利の源なる神の聖寵に、我等を固める道である。

第卅四章 徳は徐々、漸々にして順次に得べき事

基督の眞止なる兵士にして、完全徳の頂きに達せやうと望むで居るものは、其の徳の道に於る進

歩に限界を畫る筈はないが、併しながら熱心の發動があつて、殊に初の中に餘り熱氣を以て之れに身を悉ぬれば、其の熱心は、途中で俄に杜絶る事があるから、程能く之れを押へる事を知らねばならぬ。既に外部の修業には程度があると云ふ事を述べたが、其の外に尙ほ又た内部の徳は、殆ど徐々に、漸々に求めるものであると云ふ事を知らねばならぬ。此の時に少しづつ行ふ事が、積り重つ

て、永く續くのである。假令は堪忍の徳の最も下の段から昇つて行た後でなければ、困難を望んで之れを喜ばんことを練習しやうなどと云ふのは餘り好い方法ではない。

萬徳は勿論數徳でも同時に練習せぬやうにして漸々に一個づつ取掛るが宜い。斯うすれば我等の心は、一層容易く、一層堅固に、徳の習慣が附くであらう。絶えず一つの徳の修練に従事すれば、



其の紀念が如何なる場合にも、一層迅速に浮び出て、我等の知識は、尙ほ一層巧妙に、之れを求むる方法と理由とを認むるのであらう。又た我等の意志は數徳を同時に練習するよりも、尙ほ一層容易く又た尙ほ一層愛念を込めて、之れに向ふであらう。

夫れから業が一個の徳に聚れば、相互の一致合同の爲めに、爲易くなり互に似寄て、居るから相

呼び相扶合ふのである。又た似寄て居るので我等の心に尙ほ深き感じを興へるのである。此の似寄の點を以て、前の業が喚起された如く、最う新に起る業を入れる準備が出来てある。

既に述べた所に、別て力を添る事實がある、即ち眞面目に一の徳を練習する人は、他の凡ての徳をも練習するになる、夫れで一の徳の増加は、他の凡ての徳の進歩を來す。之れは決して怪むべき

事でない、何故ならば徳は凡て同一に皆な神明の  
光線に過ぎぬので、相互に密接し、關聯して、離  
されぬものであるから。

第三十五章 徳を求むる種々の方法、及び先  
づ暫時一個の徳に従事する爲めに用ふべき

方法

前に述べた外、徳を求むるには、精神寛大、意  
志强固にして、種々の困難の起る事を豫知し、此

等に打勝つ決心がなければならぬ。

加之殊更に心を傾け、又た愛を以て、此の練  
習に従事せねばならぬ。此の徳は凡ての完徳の本  
と未とであるから、如何に神の聖意に適ひ、如何  
に高尚にして、良好であるか、又た我々には如何  
ほど有益、且必要であるかを考へれば、尙ほ容易  
く其の志は暖る。

毎朝、今日の中に起りさうなと思はれる事柄に

應じて、徳業を修練する事を堅く決心せねばならぬ。夫れから果して此の決心を忠實に守つたか、如何かと云ふ事を幾度も調べて、新に熱誠を込めて、其の決心を立直さねばならぬ。乃で此の業は我等が現に求めやうと志して居る徳には、特別に當嵌めねばならぬ。

又た聖人の模範、我等の祈禱、基督の御生涯、及び御苦難に就ての黙想等、靈生に於て極めて必

要なる修業をも又た此の徳に格別に當嵌るが宜い。其の他の事柄が、幾千千萬別であつても、皆な同一の目的に向けられ得るが、之れを後に述べる積りである。

徳の内行と外行とに能く熟練して、我等が自然の傾向に應ずる行ひを爲すが如くに、容易く迅速に行はれるやうにならねばならぬ。又た前にも云ふた通り、此の業が我等の性質に反すれば反する

程、愈よ迅速に徳の習慣を、我等の心に附けるのである。

聖書に在る神の言を、或は大聲に唱へ、或は心の中で、適宜に黙想するのは、此の修業を助けるに、珍らしき功能があるから、我等の行ひつゝある徳に就ての言を、何時も心に備へて、幾度も就中反対な悪が顯れ出た時、之れを操返さねばならぬ。假令は目下我等が、堪忍の徳を求むる爲めに

働いて居るとすれば、左の聖言若くは之れに類するものを用ふるが宜い。

「諸子よ、爾等の上に罹る怒に耐忍を以て堪へよ」  
(バルク四の廿五)

「貧き者は恒に忘れらるゝにあらず、苦む者の望は長へに亡びず」(詩篇九の十九)

「堪忍者は猛夫に勝り、己が心を治むるものは、城を攻取るものに勝る」(箴言十六の卅二)

「爾等は艱苦の中に、其の靈魂を保つべし」(路加傳廿一の十九)

「耐忍を以て、我等の前に備へたる馳場を走り、信仰の導引となりて、之れを全ふする耶蘇を望むべし」(へブレヤ書十二の二)

之れと同じやうな志を以て、左の短き祈禱、

若くは之れに類するものを唱へても宜い。

我が神よ、何れの時にか我が心に、堪忍の楯を

装はるゝや」

「我が主の聖意に適ふが爲めに、何時平穩に凡ての困難を経過ぐるを得べきや」

「嗚呼苦痛は我れの爲めに、苦みたまひし救主に我れを似らしむるを以て、千萬ありがたきもの

なる哉」

「嗚呼、我が靈魂の唯一の生命に在す主よ、何時御光榮の爲めに、萬苦の中に満足して、生活す

るを得べきや」

「若し我が靈魂患難の火の中に、尙ほ一層苦まん

どの熱望に燃ゆるならば、幸福なるかな」

我等の望を表して用ひられる語は、畧ぼ斯の如

きものである。是れ我等の徳の道に於る進歩に關

するもので、敬虔の精神によつて、我が心にも口

にも浮んで來るのであらう。

此の短き祈禱を投詞と名く、何故なれば之れは

我等が箭の如く、天に投げつける祈禱であるから

又た此の祈禱は我等を徳に勵すに、大なる機能が

ある。併しながら之れを上げるには、兩の翼が要

る、即ち其の第一は徳行を修練すれば、我が神の

聖意を満足せしむると、深く合點する事、第二は

神の聖意に適ふ一片の志を以て、徳を求めたい

と、眞實熱心に望む事である。此の兩の翼を以て

上ぐれば、我が祈禱は神の聖意に達するに違ひな

い。

第卅六章 絶間なく警醒して、徳の道に進むべき事。

既に述べた外に、尙ほ徳を求むるには、最も必要な事の中に、忘るべからざるものが一ある。

夫れは我等が目指て居る目的に達する爲めに、何時も前に前にと進まねばならぬ必要のある事である。斯の如き道に一刻でも立留るのは、是れ即

ち後戻するのである。

何故なれば徳を行ふに立留る時は、我等を動かす感覺的慾と、世事に對する激き傾向とが、再び心に起つて、種々様々の亂れた情慾を發せしめ、徳を亡し、或は非常に弱くならしむるのみならず、我等は徳に進むを以て、全善なる神より受くる筈の巨多の恩寵と恩恵とを失ふのである。之れに由つて見れば、靈生の道は、世の道と違ふ事が分る

世の道に於ては、縦しや立留てつも、今まで歩いて来た道は、些も失はぬが、徳の道に至つては、夫れが損になる。

加之現世の旅人の疲勞は、續て歩く運動と共に、自然と増して來るのであるが、之れに反して徳の道は、前へ進めば進む程、愈よ力と元氣とが益す強く成る。

矢張、徳の修練に於て、下流意志の反抗で、道

が險しくして疲れるやうに成つてあつたが、其の下流意志は衰へ、却て徳の存する上流意志が、固くなつて強く成るのである。

夫れに由つて徳に於る進歩が、之れを行ふ時の苦の幾分を、始終に減じて行くのである。又た之れに反して仁慈なる神が、此の苦の中へ交せて下さる胸中の歡喜は、何時も豊に溢れて來るのである。斯て益す喜ばしく愈よ易しくして、徳から



徳へと進んで行けば、終に山の絶頂に達す、是に於て乎、靈魂は完全になつて、雷に厭氣のない所ではなく、嬉しく引かれて、徳を行ふのである。此の變化は殆ど自然に出来る、何故なれば靈魂は、亂た情慾に打勝つて、之れを制した上は、自ら所造物をも自己をも支配するやうに成るのである。其の時は神の聖意の中に、極めて幸福なる生活を爲し、其所に於て、甘味に充滿る務の中に、安じて居るのである。

第卅七章 德行修練を續けながら、徳を得る

機會を避くべからざる事。

既に完徳に至る道に於て立留る所なく、何時も前へ前へと進まねばならぬ事は、明らかに分つたが、之れが爲めに注意して、徳を得る種々の機會をば、一も失はぬやうにせねばならぬ。故に此の有益なる機會を、成るべく避けやうとするのは、

其の實益を知らぬのである。

乃で前の例に依つて言へば、茲に我等が堪忍の習慣を附けたいとすれば、我等に短氣を惹起させる人及び業、又は思などを避けるのは不利益である。

同じ又た或る交際なども、我等に面白くないからと云ふて、打棄てゝはならぬ。却て我等が五月蠅と思ふ人と話し、或は之れと交る事のある時に

は、何時も覺悟して、其の人が惹起させる厭氣と倦怠とを、忍ぶやうにして置かねばならぬ。若し然うせぬならば、決して堪忍に慣れる事はあるまい。

又た今や或る勤が厭であると假定し、夫れは勤其物が厭であるのか、之れを命ずる人が厭であるのか、或は尙ほ氣に入る事を爲る妨碍になるから厭であるのか、何れにしても之れを始め、之れを

續けるのを止てはならぬ。縦しや夫れが我等の心を亂しても、又た之れを棄つれば安心になりさうであつても、決して止てはならぬ。若し我等が斯の如く、自分の傾向に任したならば、決して堪忍の稽古は出来ぬ。又た假令安心するとしても、眞正の安心は得られまい。何故ならば其の安心は、情慾を離れて徳を装ふて居る精神より出るのでないから。

同く又た時々五月蠅と云ふ考が起り、我等の精神を煩し、或は亂すやうな事があつても、何時も夫れを遠くへ退けてはならぬ。其の理由は其の思が倦怠を來すと共に、又た困難に耐忍するを習はせる利益を來す事が出来るからである。

外の意見を有て居る人もあらうが、併しながら夫れは我等に、苦を遁れるのを教ふるので、我等の希望しつゝある徳を求めしむるのではない。

然し未だ熟練して居らぬ新兵ならば、此の様な場合には餘程注意して、工妙な演習を爲ねばならぬ事がある。自己の徳と力との多少によつて、或は機會を冒し、或は之れを避くる事を知らねばならぬ。

去りながら敵に全く背を向けてはならぬ、反對の機會を悉く遠ざけるやうな、退却の法を採つては否けない。何故なれば之れを以て、失墜の危険

を逃れるかも知れぬが、兎角將來の爲めには、不堪忍の誘惑に、尙ほ一層落入易いやうになるであらう。夫れは何にも怪むべき事ではない、我等が其の誘惑に對して身構もせず、反對なる徳の行を以て、自分を強むる事をも爲て居らぬから、當然の事である。

茲に繰返して云ふが、彼の邪淫の誘惑に對しては、此の方法は當嵌らぬ、此の事に就ては前に特

別に云ふて置いたのである。

第卅八章 徳を得るが爲めに戦ふべき機会、

殊に最も困難な機会を貴重すべき事

徳を得る道を遮る機会を避けぬばかりでは未だ  
足らぬ、此の機会きくわいは餘程よほやね價值のあるもので、大に  
貴重きちやうすべきものであるから、時々は之れを求むる  
やうにして、此の機会きくわいが来れば喜んで直たぢに受けね  
ばならぬ。加之我等しかのみならわれらの自然しぜんの傾向かたむきに激ひげく反對はんたいすれ

ばする程、之れを一層貴重きちやうして大切たいせつにすべきもの  
である。

若し我等われらが左の觀念くわんねんを深く心こころに染込しみこませたなら  
ば、神かみの祐助たすけによつて、屹度きつぎ左様さやうするやうに成な  
第一だいに先づ徳とくを得る爲めには、機会きくわいが相當さうたうの道みち  
否いや必要ひつやうの道みちに相違さうひない、故ゆゑに徳とくを神かみに願ねがふ時は  
間接かんせつに機会きくわいをも願ねがふのである。然さもなければ我等われら  
の祈禱いのりは無益むだと成なり、前後ぜんご不揃ふぞろひであつて、神かみを試こころみ

るに當るであらう。何故ならば神の普通の攝理ては困難なくして堪忍は與へられぬのであるから。一の徳に就て云ふ事は、凡ての徳にも同じく云はれるのである。徳は反對なる機會に打勝たねば得られぬと云ふ事、又た其の機會が大なる困難であるを以て、愉快と大切とに思はれる程、徳を得せしむる祐助となり、功能もあると云ふ事は、争はれぬ事實である。何故ならば其の場合に於て勤

る業は、一層寛大にして徳に達するに一層容易く且つ近き道を開くのである。

此の故に一視一言の如き些細な機會でも、之れを等閑にすべきものではない、成るべく之れを利用するやうに力めねばならぬ。勿論それより生ずる業も亦た、餘り大事とは思はれぬが、併し斯う云ふ機會に於ては、困難な場合より尙ほ度々出来るのである。

第二我等の感すべき、一の事がある、之れは前にも云ふたが、凡て我等に起る反對は、皆な神から出ると云ふ事である。神が我等に之れを遣したまふのは、我等に之れを利用さして、其の利益を收めしむる爲めである。

勿論、後に述べる積りであるが、我等の缺點や他人の過失から起る反對があつて、之れは罪を嫌ひたまふ神から出るとは確に云はれぬのである。

(399)

併し神が之れを止める事の出来るのに、止めずして許したまふと云ふ意味に於て、矢張、神から出ると云はれぬ事もない。又た他の意味に於て、自己の缺點や他人の野心から起る艱難苦痛も、神から或は神によつて出て来るのである。何故なれば實際これは神より受けた力によるからである。神の眼は至聖にして、限りもなく嫌ひたまふ醜き事を認むるゆゑ。我等の之れを行ふのを望みたまは

ぬけれども、夫れに依つて現れる徳の爲め、或は我等に知れざる他の理由の爲めに、我等の之れを忍ぶのを望みたまふのである。

此の故に已れ及び他人の罪の結果によつて來れる凡ての面白くない事を堪忍して忍ぶのは、神の望みたまふ所であると確信すれば、人々が自分の短氣の口實に神は雷に之れを望みたまはぬのみならず、如何なる惡をも嫌ひたまふと云ふやうに語

るのは、畢竟自己の缺點を覆ふ爲めにする詰らぬ言譯に過ぎぬのである。之れは十字架を負ふ事を否むのである。神が之れを負ふべしと命じたまふのは分り切た事であるのに。

尙ほ進んで云ふが、他の事は兎も角、神は飛んだ事より起る心配よりは、寧ろ人の罪によつて生ずる困難、殊に我等に世話になつて、我等に恩のある人々の罪より生ずる困難に於る堪忍を格別に



嘉よみしたまふのである。何故なぜなれば此この時は、飛とんだ事ことの起おこつた時ときよりも我等われらの傲慢がうまんな性質せいしつを押おさへるに、好よき機き會くわいとなるからである。又また此これら等の困こん難なんを甘あまんじて忍しのべば、神かみの聖みこ意ゝろを満まん足ぞくせしむるのである。何故なぜなれば神かみの全ぜん能のうと其その語ことばに盡つくし難がたき仁じん愛あいを明わきかに現あらはす場あひ合あひに於おいて、我われら等らが神かみと共ともに働はたらくからである。斯かくの如ごとき行ことは罪ざい惡あくの毒どくより、徳とくと善ぜんとの好よき果みを結むすばすのである。

是こゝを以もつて神かみは我われら等に徳とくを修おさめて眞ま面目じめに之これに從じゆ事じする望のぞみのあるを認みこめたまふや否いなや、直たちちに最もつも激はげしし誘い惑わく、最もつも困こん難なんな機き會くわいの苦にがが杯さかづきを備そなへ、時ときの宜よろししに應おうじて、之これを我われら等に飲のますやうにしたまふのである。乃そこで我われら等らの方ほうからは其その寵いつくしみを謝しゃす爲ため、己おのが利り益えきの爲ために、欣よろこんで之これを頂いたぎ、出で來きる丈だけ速すみやか、又また固かたき決けつ心しんを以もつて、一いつ滴てきも殘のこさず飲のみ干ほさねばならぬ。決けつして躊躇ちゆうちゆうする時ときではない。

何故なれば此の杯は、誤る事なき神の聖手を以て備へられた飲物が盛てあるから。又た之れが組立てられた元素は、苦い程、失れ程、靈魂の良薬となるのであるから。

第卅九章 如何に異なる機會が同一の徳行を修練するに益するか

一時に數徳を求めんとするよりは、暫時の間は唯だ一の徳に従事するのが、尙ほ有益であること云

ふ事は、既に述べた通りであつて、凡て出來する實行的機會は、幾干相互に異つて居つても、皆な此の唯だ一の徳の方へ向ける事が出來ると云ふ事は明かに分つた、今や如何に容易く之れを實行する事が出來るかを見ねばならぬ。

一日でも一時間でも、多少激敷反對を忍ぶ機會に遭ふ事が度々出來る、仮令ば我等の行ふた事には、答むべき所はないのに、或る人が之れを答む

る事もあらう。又た何かの理由によつて、他の人が我等に向て咬く事もあらう。我等が何か特別の事か、或は僅な世話でも頼んだら、無慙に斷られる事もあらう。又た眞面目な根據もなくして、無暗に悪く批評せられる事もあらう。尙ほ體に何か痛を覺える事もあらう。厭な煩はしい業に従事せねばならぬ事もあらう。調理の悪い食物を出される事もあらう。又た何とか角とか此の憂世で人間

の憫然な生涯に満たる、倍と激い、倍と憂ひ困難を多少堪忍すべき事柄が起る事があるであらう。然るに此等の機會、若くは之れに類する場合に於て、仮令種々の徳行を生ずる事が出来ても、若し前に述べた規則に従ふて行かうと思ふならば、始終我等は現に學びつゝある徳に歸す所の業を修練するが宜い。

仮令ば此等の機會の來た時、若し堪忍を修練す

るのならば、我等の勤る所の業は服従する心を以て、又た歡喜を以て、反對を忍ぶに向ふやうにならねばならぬ。

謙遜を求めやうとするのならば、我等は困難の中にあつて、凡ての災を受くべき身であること云ふ事を心得る機會を認むるであらう。

服従を得るに働くのならば、反對を利用して速に神の權能に歸服するやうに力め、又た神の聖意

なるによつて、我等の爲めに試の機會と成る凡てのものに服し、神の聖意に適ふやうに勵まねばならぬ。

若し我等の力を盡す目的が、清貧にありとすれば、世の凡ての慰藉のないのを喜ぶやうに爲ねばならぬ。

若し又た愛徳を得んとするのならば、他人は我等の求めつゝある徳の機關のやうなものであると

思ひ、之れに對して愛の業を起し、又た神に對しては、此等の困難の生ずる所の愛に満る源として或は我等の練習の爲め、且つ靈的の利益を得せしむる爲め、其の困難を許したまふ愛ふかきものと  
して、愛の業を起さねばならぬ。

斯く日々に起り得る様々の場合に就て述べた事を以て、如何に病氣の時、或は何かの久しき困難の時、現に求る所の徳の業を、行ひ得ると云ふ事を

を、推して悟る事が出来る。

第四十章 各徳の修練に掛る可き日數、及び

其の徳に於る進歩の徴候。

各徳の修練に従事すべき日數は、一般に規定るべきものでない。各人の身分、特別の要求、靈生の道に於る進歩、指導者の判断等によつて、規定るべきものである。

併しながら我等が徳を修練するに、前に述べた

凡ての方法と注意とを、眞面目に使用するならば、  
 數週間に至極好果を得る事の出来るのは、疑ふべ  
 からざる所である。

心の不愉快や黑暗や煩悶の中にあつても、又た  
 靈生の引力を覺えずしても、尙ほ勇ましく徳行を  
 修練して止まざるは、眞正の進歩を認め得る一の  
 徴候である。

我等が徳行を修むるに於て、肉體の快樂に反對

するものも、亦た是れ確に一の徴候である。肉體の  
 快樂が愈よ其勢力を失へば、我等は愈よ徳に進歩  
 したと云ふ事が信ぜられる。故に若し下流意志及  
 び感情的部分に於て、殊に意外の、突然の誘惑に、  
 最早反對も抵抗も感じぬやうになれば、是れ我等  
 が求めつゝあつた徳に、達したと云ふ一の徴候で  
 ある。

尙ほ又た我等が徳行を修むるに、歡び勇んで速

かに従事するやうになれば、愈よ此の點に眞正の  
 進歩を爲したと思ふ事が出来るのである。

併しながら注意すべき事がある。仮令久敷以前  
 から、多くの戦を経た末、最早誘惑には感じぬや  
 うになつたからとて、我等は求よ徳を求め得た、  
 情慾には勝つて了ふたと、確に思ふてはならぬ。  
 然う安心するに於ても、悪魔が狡猾な働を以て  
 我等を欺く事が出来る。又た窈な傲慢によつて、

我等が徳の如く做す所のものが、一の惡に外なら  
 ん事がある。如之我等の熱心に働くを以て、愈よ  
 神が我等を召しつゝある完徳に向ふものならば、  
 最早我等は徳に達する爲めに、既に如何ほど道を  
 歩いたと云ふても、漸く未だ道に入つたばかりに  
 過ぎぬと思はねばならぬ。

是の故に心戦に於ては、何時も未熟の新兵の如  
 く若くは幼き子供の如く、自己を做すより外はな

い。始終修練を、其の初歩から仕掛つて、未だ今  
 まで何をも爲た事のないやうに爲ねばならぬ。  
 又た今迄に如何ほど進歩したか杯と、好奇に探  
 るよりは、寧ろ徳の道に進む事を、専ら勵むやう  
 にするが宜い。我等の心の眞正の探求者は、神は  
 かりであつて、如何ほど進歩したと云ふ事を、或  
 る者には知らし、或る者には知らさずに措きたま  
 ふので、之れは神が人によつて上げたり下げたり

する思召から出るのである。丁度慈愛の深き父の  
 如くであつて、或る者を危険より逃れしめ、或る  
 者を危険に逢はして、徳を増す機會を與へたまふ  
 のである。  
 是の故に縦や人が自ら徳に於る進歩を、測る事  
 が出来ずとも、夫れでも之れが修練を、繼續する  
 のを止めてはならぬ。何時か益に成る時、神の聖  
 意に適ふ時、眼が開けて之れが進歩を、認めるや



うにはなるであらう。

第四十一章 堪忍を以て忍びつゝある困難を

逃れ度との望に身を委ぬべからざる事、又

た我等の望を徳に適合せしむる爲めに制限

する方法

我等が何か困難に遭ふて居るのに、又た堪忍を

以て之れを忍びつゝある時には、悪魔、或は自愛

心の爲め、之れを逃れ度と云ふ望に、引かされぬ

やうに注意せねばならぬ。然もなければ我等の爲  
めに、二個の不良結果が生ずるであらう。

第一は此の望は我等をして堪忍の徳を失ふやう  
な危険に逢はしむるであらう。或は少くも我等を  
して、漸次短氣に成り易からしむるであらう。

第二は此の望によつて、我等の堪忍は不完全に  
なるであらう。又た神より受くる報酬は、之れを  
忍んだ時に應ずる丈のみ受くるであらう、之れに

反して逃れ度と云ふ望なくして、却て神の仁愛に  
 全く身を任す心ならば、假令實際に忍ぶ所は一時  
 間、若くは夫れよりも僅の間に止まつたとしても  
 神は長き辛抱にのみ與ふべき報酬を與へて下さる  
 であらう。

是れによつて見れば、此の場合でも、亦た他の  
 巨多の場合でも、一般の規則として我等の望を押し  
 へ、唯だ其の真正且唯一の目的たる、神の聖意に

のみ之れを向はしむるやうに爲ねばならぬ。之れ  
 望を正しく直くする方法である。又た此の方法に  
 よれば我等が如何なる困難に遭ふても、常に平氣  
 を失はぬのみならず、始終満足であらう。其の時  
 は最う然うなる外はない。何故なれば何事も最上  
 の神の思召によるの外なく、又た其の思召の外に  
 何事も望がないからして、欲する所のものは欲す  
 ると同時に之れを得るやうになり、時に應じて何

でも成就するやうになるからである。

併し今云ふた事は自分の罪、又た他人の罪には當嵌らぬ。何故なれば罪は神の思召でないからである。唯だ困難苦痛に就てのみの話で、夫れが何れの方から起つても、其の通に耐ゆべき筈のものである。

如何にも夫れが時としては殊に甚しく、激しくして、深く身に沁み、心の底まで達して、最う活

きては居られぬと思ふ程になる事もあるが、夫れは矢張十字架であつて、神が其の友人に、而も其の最も深く愛したまふものに、殊さら之れを遣りたまふのである。

如何なる場合に於ても忍ぶべき苦に就て云ふた事は殊に其の結果たる凡ての憂慮に就ても悟らねばならぬ。即ち之れを逃れんとして、凡ての至當なる方法を用ひてから、又た神が我等の之れを忍

ぶのを望みたまふならば、其の通り心得ねばならぬのである。

併しながら之れを逃れる方法を用ふるのは、神の規定によつて、又た其の思召に従ふて用ひねばならぬ。蓋し神が其の方法を供へたまふたのは、我等に其の方法を用ひさせる、爲めであるに相違はないが、我等の之れを用ふるには、我意執着して居るとか、或は神に仕へて其の思召を遂げ度と

云ふよりは、一層困難を逃れ度と云ふ、望で、之れが好であるからして、之れを用ふるのは神の望みたまはぬ所である。

第四十二章 悪魔が度合を外れた方法を用ふる

我等を欺かんとする時に之れに抵抗する方法

悪魔は我等が熱心なる、又た善く規定されたる心組を以て、徳の正き道を歩んで居ると云ふ事を

見、又た其の奸策で我等を欺く事が出来ぬと云ふ事を見れば、方法を更て光明の天使の客に變じ、而して樂しさうな考や、聖書の金言や、聖人の手本などを以て、我等を切に促し、何歟の危険に陥れる爲めに、無暗に完徳の頂へ歩いて行くやうに勧めるのである、故に彼れは我等に鞭撻、斷食、毛衣、及び之れに類する苦業を以て、激く身體を懲すやうに迫るのである。之れは取りも直さず我

等を傲慢の罠に陥れやうとするのである。就中婦人などには、常ならぬ事を爲るやうに勧めるのであるが、此の點に於る其の目的は、我等に何かの病でも起さして、善業の出来ぬやうにし、或は非常に疲れさし、若くは煩はしく思はして、精神的修業が厭らしく、辛抱しきれぬやうに爲るのである。斯な心持では漸次と善に對する熱心が冷て行く、又た夫れで我等は以前よりも早く世間の樂や

児戯つまらぬことに耽ふけるやうになる、之れ多くの人々の身に  
 起つた事ことであつて、此等の人々は自慢ひましながら、  
 無暗ひやみなる熱狂ねつきやうみに身を委ねたるを以て、其の徳を度  
 合あひの過すぎた苦難くなんの試嘗ためしに懸けたので、自分じぶんに迷想まよひの  
 犠牲いけにへになると同時に、悪魔あくまに嘲弄てうろうせられたのであ  
 る。茲こゝで前に述べた事を能く守つたならば、此の  
 禍害わざわいは避けられる筈はずであつた、此の克己こくぎの業げふは、  
 之れに相應さうおうする身體しんたいの勢力せいりよくと、精神せいしんの謙遜けんそんとに合あ

する時には、幾千賞讃いくらしやうさんすべく、幾千有益いくちゆうやくであつて  
 も、能く注意ちゆういして加減かけんせねばならぬもので、各自おのづか  
 の身分みぶんと境遇きやうぐうとに相當さうたうせる度合どあひを以て、行ふべき  
 ものであると云ふ事を、覺ゆる筈はずであつた。  
 人は誰たれでも皆みなんな聖人せいじんの如ごとくに、必ずしも嚴重げんぢやう  
 なる生活せいくわつすを爲なる様に召めされたものではない。併しかし  
 ながら其の希望のぞみの熱心ねっしんと有効いうこうとを以て、聖人せいじんの跡あと  
 を慕したふ機會きくわいのないものはないのである。誰たれにして

も熱心に祈禱する事も出来れば、基督の爲めに勇ましく戦ふたものに、備へられたる名譽の冠を望む事も出来、世を輕んじ已れを輕んずる事も出来る。何んな人でも淋さを甘んじ、沈黙を保ち、人に對し、謙遜と柔和とを守り、害を耐え、已れを害した人に善を以て報ゆる事は出来るのである。又た凡ての罪を遠かり、軽い過失をも遠かる爲めに働く事の出来ぬものは一人もないが、此等の修業

は却て身體の苦業よりも、一しほ神の聖意に適ふのである。乃で一旦過度の苦業を行ふてから、之れを止めて了ふと云ふ様な危険に逢ふよりは、寧ろ前に度合を量つて之れを用ふるが宜い、必要ならば夫れを漸次に増す事が出来る。且つ又た之れと正反なる過度の舉動を遠けねばならぬ。之れは既に靈生の道に進んで居ると思はれる或る人々に於て見える事で、自然の誘引に目を眩まされて、

迷はされるやうになるのである。之れは外の事でもない、自分の健康を保つ爲めに、餘計な憂慮を爲て居る人々の話である。彼等は健康に就て非常に焦慮し、非常に憂慮して、何か些細な事でも變つた事があれば、夫れに恐れて病氣にでも成りはすまいかと、悚然して居るのである。何を爲るにも話すにも、生命を大切にする事ほど氣に懸け、又た喜んで話す事は、他に何もない位である。夫

れ故に之れを見れば、自分の體に適ふ食物を求むるのに始終心配して居る、夫れも餘りに氣を附けるので、却て弱くなるやうになつて了ふのである。併しながら彼等の説ふ所に依れば、之れを斯うするのは、神に事へるに一層適當になる爲めばかりである。云ふて居るけれども、之れは口實に過ぎぬのである。何故なれば實際彼等は、身體と精神、即ち兩個の大敵を和合させる事にのみ勤め、



當に之れを満足させぬのみならず、却て兩方とも眞正に害するのである。蓋し此の過分の心配は兩個の結果があつて避けられぬ。即ち身體に取りては健康を失ひ、靈魂に取りては敬虔を失ふのである。

故に如何なる方面より見ても、前に述べた度合を守りながらも自由を保つのは尙ほ一層確實であつて、且つ有益な道である。何故なれば人は皆

な同一の規定によると云ふ譯には行かず、各自の境遇と性質とを見て、事を釣合さねばならぬから徳を求むる點に就て、既に述べた所を、復た茲に操返して云ふが、外部の修業に於ては、内部の德行に於るが如く、終始制限を守つて、階段によつてのみ進まねばならぬ。

第四十三章 我等の悪き傾向と悪魔の誘惑との影響によつて猥に他人を批評するに傾き

易き事、及び之れに反抗する方法

前に確めて置いた自尊心や虚榮心の缺點から、我等に大害を來す他の缺點が出て來る、即ち我等が人の上に下す所の邪推である。之れが爲めに我等は人を卑いもの、輕んずべきもの、卑劣な者の如く做すやうに傾くである。此の缺點は傲慢の傾向から起り、之れによつて増長し、其の勢力も強くなるのである。又た反對に傲慢は、此の邪推によ

つて増長し、自ら満足して漸次と迷ふのである。何故なれば我等は他人を重んずる點に就て、之れを下れば下る程、思はず知らず自分の心の中に自負して、己れを高めるのである、我等が他人に於て認めた缺點は、決して自分には無いと信じて喜ぶのである。

悪魔は我等に斯る悪い氣組のあるのを見れば、力めて我等をして他人の缺點に就て能く目を開き

且つ能く注意して之れを認めしめ、又た之れを針小棒大に思はしむるのである、我等が他人の大缺點を認め得ざる時には、悪魔が如何に策畧を廻らして、其の小缺點を以て、我等の心に感ぜしむるやうに力むるかは、自ら警戒せぬ人には容易に信ぜられず、又た想像されぬ程である。

悪魔が我等に斯まで害を加へんと企てるのであるから、我等は警戒して、其の罅に落入らぬや

う、注意せねばならぬ。悪魔が我等に他人の犯した、何かの過失を示す時は、迅速に其の思念を避けるやうにするが宜い。若し之れに就て判断を下すに引かされる傾向があると思ふたならば、之れに引かれぬやうにして、判断する権のない事を思はねばならぬ。縦し其の権があるにしても、之れを行ふに用ふべき正義と公平とを用ひぬ事のあるを恐れねばならぬ。千萬の小さな情慾に圍まれ、其

の影響によつて、他人を邪推するに傾くのである  
 其の影響は、中々逃れがたい。

斯る判断に對しては、機能を有する薬がある。

夫れは心の中に、己が心の需用を慮る事である。

然うすれば自己に於て、又た己れの爲めに爲すべ  
 き事が多くあつて、到底他人の缺點などを思ふ暇  
 も心も、残らぬ程であるといふ事を認むるであら  
 う。

又た此の意見を適宜に守つたならば、此の邪推  
 の因て出て来る所の悪質より、我等の心の眼を愈  
 よ清らかにして、避けるやうに成るであらう。

加之我等は人を悪く思ふ時に、我等も同じ缺點  
 の根を持つて居ると思はねばならぬ。又た自己に  
 野心でも起れば、他人に於て甚だ氣に觸る事を、  
 自分も仕出すやうになると覺えねばならぬ。

故に若し我等が他人の缺點に就て、猥に判断を

下したならば、自から激く之れを折檻して、他人に於て斯く厳しく罪する缺點は、自分にもあると做して、心の中で斯う云はねばならぬ「嗚呼、淺ましき我れ、人よりも罪人なる我れが、何で頭を上げて、兄弟を妄に判断するものか」と。

斯の如くすれば、我等に向けられて、我等が將に打たれんとした武器を、自ら己れに向つて使ふから却て益になつて、己が傷を癒すものと成るのである。

である。  
併しながら若し明白にして、公然たる過失のあつた上ならば、夫れでも哀憐の心を以て、容赦して遣らねばならぬ。或は此の過失のあつた人にも隠密な徳があるかも知れぬと思ふが宜い。夫れが誰にも人には知れぬが、神が其の過失を措きたまふたのは、恐らくは此等の徳を、保たせる爲であるかも知れぬ。神が暫く斯々の過失の中に彼れ

を在らしめ、己が目にも淺ましきものであると云ふ事を、見せしむる爲めである。神は彼れが人に卑しめられるを以て、謙遜の貴重な果を結ばんことを望みたまふのである。斯うして神の聖意に尙ほ能く適はしむる機会を與へたまふのである。結局損害よりは利益の方が實際巨多なるものである。尙ほ一步を進め、縦や其の過失が明白にして公然たるのみならず、一層重大にして而も頑固に主

張すると云ふ程なるにもせよ、其の時には神の恐しき聖計を考へるが宜い。茲に於て乎、前に大悪人なりしものが、後に聖徳の最も高き度に達したものと見ゆれば、之れに反して一旦完徳の高尙な光を放つて後、遂に過失の最も深き淵に陥つたものも見ゆるであらう。

之れを考へて、人の爲めに恐れると云ふよりも寧ろ己れの爲めに恐れて、慄かねばならぬのであ

る。

我等が總て他人を善く思ふのは、皆な悉く聖靈より來るのであると確信せねばならぬ。又總て他人に對する輕蔑の思念、邪推、苦々敷事等は却て、我等固有の惡心、或は惡魔の誘惑の結果であると確信せねばならぬ。

故に若し他人の缺點に、激く感じた事があつたならば、其の感じを一刻も早く、我等の精神と心

とから、消し去るやうに務めねばならぬ。

#### 第四十四章 祈禱

是迄證明して來た通り、己れを恃まぬ事と、神に頼む事と、我等の能力の修練とが、心戰に斯くまで必要である如く、第四の武器であること云ふた祈禱は、尙ほ一層必要にして、缺くべからざるものである。何故なれば我等は祈禱によつて、何事をも主なる神より求める事が出来るからである。

祈禱は神の仁愛の泉より、流出づる萬の恵を、我等の上に呼下す爲めに、與へられた機關である。好く祈禱を利用すれば、神の聖手に劍を持たせるやうになつて、神は我等の爲めに、之れを以て自ら戦ひ、勝利を占めたまふやうになる。所で好く祈禱を利用するが爲めには、次の修業に馴れるか、切て馴れるやうに、力めねばならぬ。第一我等は萬事に就て、尊嚴なる神に事へ、而

も最も聖意に適ふ方法を以て、之れに事へ度との眞正の望を、心の中に保たねばならぬ。此の望を惹起す爲めには、左の觀念が益になるであらう。先づ感嘆すべき神の性徳、殊に其の仁愛威稜、知徳、美徳、及び其の他の數多の徳によつて神は我等の奉事と稱讃とを限もなく受くべきものと觀念すべき事である。

又た神が自ら我等に事へんとて、三十三年間、



忍びたまふた凡ての苦痛と疲勞とを覺へねばならぬ。我等の臭くして毒のある傷を、手當して癒したまふたのは、彼の福音の譬に在る如く、油や酒を用ひ、又た之れを繙帶して癒したのではなく、御自分の血管から流されたる、最と尊き御血、又た鞭や荊や鐵釘によつて傷けられたる、其の尊き五體を以て、之れを癒したまふたゆである。

次に此の神の愛の大恩を考へねばならぬ。其の

恩の大なる事は、我等が之れを戴けば、我等自身を支配し、悪魔にも勝つを得、天に在す父の子と成る事が、出来る程であると云ふ事を觀念するが宜い。

第二、我等の心に熱き信仰を起し、且つ神は凡て我等が神に事ふる爲め、及び自己の救靈の爲めに必要な事を、我等に與へて下さる聖意であると深く頼込で居らねばならぬ。

此の尊き頼は仁慈なる神が其の恵の寶を以て、  
 満したまふ器である。此の器は大きくなればなる  
 ほど、祈禱が我等の心より潤澤に、且つ熱心に、  
 湧出づるやうになる。

不變無上の大主が、我等に其の恵を願へよと命  
 じたまひ、又た聖靈が、信仰と辛抱とを以て之れ  
 を願へば、與ふると約束したまふたのに、何で與  
 へて下さらぬ事があらうぞ。

第三、我等が祈禱に従事せんとするには、祈禱  
 其物に於ても、又た祈禱の功能に於ても、自ら望  
 む所によらずして、神の望みたまふ所を欲すとの  
 心を以てせねばならぬ。と謂ふ意味は専ら我等の  
 祈禱を奨勵すべき所のものは、即ち之れが神の命  
 であるから、又た聞届けられるのを望むのは、唯  
 だ其の思召による事であると思はねばならぬと云

ふ事であつて、結局心得べき事は、唯だ我が意志を神の思召に一致せしむると云ふ事である。神の思召を我等の意志の傾く所に従はしめんとするが如きは、傲慢の甚しき事である。

是れは明かな道理である。我等の意志は自愛によつて汚され、傷んで居るのであるから、誤り易く、其の願ふ所を能く知らぬ事がある。併し神の思召に至つては、其の得も云はれぬ慈悲に始終一

致して、決して誤る事は出来ぬ。故に之れが凡ての意志の標準にして、此等を司らねばならぬ。之れが凡ての意思の奉事服従を受くべきものなると同時に、之れを要求したまふのである。

是れに由りて之れを觀れば、我等の願を何時も神の思召に合はさねばならぬ譯である、又た何様であらうとの疑ある時には、祈ると同時に我が望を天に在す父の聖意に従はさねばならぬ。

併しかしながら確たしかに神かみの聖意みこころに適かなふと決きまつたもの、  
假令たとへば善徳ぜんとくを願ねがふ時ときの如ごときも、猶なほ神かみの聖意みこころに適かな  
はんとの意志いしと、神かみに事つかふるに之これを用もちひんどの  
意志こころざしとを以もつて願ねがはねばならぬ。其その他たの理由わけを以もつ  
て願ねがふのは、幾いくら善よいと思おもはれても、決けつして之こ  
に及およばぬのである。

第四よつ、祈禱いのりには之これに相さう當たうせる業げふを添そえねばな  
らぬ。又またた祈いのつてからは、願ねがひ求もとめた恩惠めぐみと善徳ぜんとく

とを愈いよいよ受うくべき身みと成なるやうに勵はげまねばならぬ  
何故なぜなれば祈禱いのりの勤つとめは、我われ等らが自おの己れに勝かつ爲ため  
に爲なすべき修業しうげふと、密接みつせつに伴ともふべきものであつて  
相方相離さうほうあひはなしてはならぬのである。然さもなくして若も  
し我われ等らが、一いっの徳とくを願ねがふばかりで、之これを求もとむる  
爲ために、何なんの事ことをも勤つとめぬならば、神かみを試こころみるに外ほか  
ならぬのである。

第五たい、願ねがひの前に、曾かつて神かみより戴いたいた恩おんを先まづ感かん

謝せねばならぬ。夫れで斯う申上げるが宜い「主よ、主は我れを造り、一片の慈愛を以て我れを贖ひ、敵の憤怒より我れを救出したまひしこと幾回なるを知らず、希くは今來りて我れを助けたまへ我れは主に對して反抗忘恩の意を示し來りしと雖も、今我れの願ふ所を拒みたまふ事なかれ」と。  
 又た若し何か特別の徳の願ふべきものがあつて試によつて之れを行ふべき機會が來たならば、之

れを神に謝して、此の機會を一の大なる惠の如くに做さねばならぬ。  
 第六、我等は神の愛憐と慈悲とにより、其の唯一の聖子の御生涯、御苦難の功德により、其の我等の願を聞届けるこの御約束によつて、神の聖意を傾くべき勢力を得るものであるから、祈禱を終らんとする時には、左の如き終局の言葉を以て、之れを了るが宜い、假令は「主よ願くは主の限な

慈悲によつて、此の恵を我れに與へたまへ」とか、或は「希くは我が願ひ奉る所を、聖子の功力によつて、我れに賜はらん事を」とか、又は「我が神よ、御約束を覺えたまひて、我が祈禱を聞届けたまへ」との云ふやうな事である。

又た時々には聖母瑪理亞、及び其の他の聖人の功德によつて、恵を願ふが宜い、此等の方々は生涯一心に神を尊んだによつて、神も此等を尊くした

まひ、己が側に勢力を與へたまふのである。

第七、祈禱を爲るには弛まず辛抱せねばならぬ。何故なれば謙遜を以て辛抱すれば、勝ち難きものにも勝つて了ふのである。彼の聖路加傳の福音の譬に在る、寡婦の絶えず五月蟻までの願が心の之れに向かぬ裁判官の心を收る事が出来たのなれば、萬善の源にて在ます神の側に於て、願を願みさする力ある事は、何程であらうか。

故に假令祈禱を爲たのに主が我等の願を聞届け  
 るのを延したまふても、又た其の願を排けたまふ  
 やうに思はれても、夫れでも辛抱して祈禱を續け  
 主の守護に對する信賴を厚く、且つ固く保つて居  
 らねばならぬ。凡て我等を、恵を以て満すに必要  
 なる事は、悉く十二分に、神にあると云ふ事を忘  
 れてはならぬ。

若し我等の祈禱に於て答むべき所がないならば

屹度終局には願ふた事が求められる。然なくば神  
 は必ず夫れよりも尙ほ有益な外の恵を與ふるか、  
 若くは一時に巨多の恵を與へたまふに、相違ない  
 と確信せねばならぬ。

又た我等が祈禱に於て、退けられると思へば思  
 ふほど、愈よ我が目にも深く謙るやうに、注意せ  
 ねばならぬ。我等の過失を考へたり。神の慈悲の  
 觀念に於て自己を固めたり、其の慈悲による信賴

を増して、之れを熱く且つ堅く保つ様に力めたりして、夫れが愈よ攻撃さるれば、愈よ我が主の聖意に適ふならんと云ふ事を忘れてはならぬ。

終に神に爲すべき感謝を何時も盡して、其の慈悲、其の知、其の愛を辨へ、神が假令我等の望む事を拒みたまふても、感謝すべきである。又た何様な困難に逢ふても、始終欣喜で神の攝理に對すべき謙遜なる服従の中に、辛抱せねばならぬ。

第四十五章 念禱

念禱とは神に精神を上げると同時に、欲する所を求めん事を、現に或は暗に願ふ事である。

現に願ふとは、心の中に何かの恵を求むる事を謂ふので、例令ば斯く申す時の如きが夫れである、即ち「我が神よ、我れに斯々の恵を與へたまへ、我れは主の光榮の爲めに之れを願ひ奉る」とか又は「主よ、我れは此の恵を願ひ、且つ之れを求む



る事は、主の聖意と光榮とに關係あるを信ず願く  
 は今我れに於て主の思召を遂げたまへ」と。  
 我等が敵に迫られると感ずる時には、斯く祈る  
 が宜い、「我が神よ、速に來りて我れを祐けたまへ、  
 願くは我れをして敵の憤怒に負けざらん事を得せ  
 しめたまへ」と、又は我が神よ、主は我が依頼所  
 にして、且つ我が靈魂の力にて在せば、願くは來  
 りて我れを速に祐けたまへ、主の祐けなくんば我

れは耐えざるべし」と。  
 何時までも續いて敵に反抗しつゝ、今云ふた通  
 りに續いて祈るべきものである。  
 戦で最も激き時が濟んだならば、神に向ひ、何  
 様な敵に對して防戦した、又た戦の爲めに如何ほ  
 ご疲勞したと云ふ事を示して、斯く申上げるが宜  
 い、「主よ、我れは主の至善なる聖手より造られ、  
 聖血の價を以て購はれたるものなるに、主の敵は

我れを主の聖手より奪ふて喰はんとせり、我れは  
 主に依頼めり、主は全能全善にて在せば、我れは  
 主にのみ信頼を置けり、而して我が無能非力なる  
 を照覽したまふ主の祐けなくんば、我れは直に而  
 も故ら敵の犠牲とならんのみ、故に我れは切りに  
 主に願ひ奉る、嗚呼、主は我が希望にして、且つ  
 靈魂の力なり、來りて我れを祐けたまへ」と。  
 暗に願ふとは神に何か恵を求むる爲めに、精神

を之れに上げて、心の中にも別段言葉を發する事  
 なく、唯だ自分の需用を、神に示す時を謂ふので  
 ある。  
 例令ば斯の如き時である即ち、我が精神は神に  
 一致して、我れは神の尊前にあれば、惡を避け善  
 を行ふに能力なき事を自覺しつゝ、而も我が心は  
 主に事ふる望に燃えて居るを感ず、因て主の尊前  
 に謙り、不動信仰を以て其の助を待ち、神の威稜

を觀想して安んずるものである。

此の自覺、此の望、此の信仰は即ち自己に缺けてある所の事を神に求むる爲め、暗にする祈禱と同様である。此の自覺が愈よ正直誠實に、此の望が愈よ燃え、此の信仰が愈よ厚くなるに従ふて、其の祈禱も亦た愈よ効能がある。

他に又た暗に祈る事で、最も簡單なものである、夫れは神の祐助を願ふ爲め、我が靈魂の眼を之れ

に注ぐばかりである、此の眼を注ぐ事は、既に願ふた恵を無言で紀念して、心の中で願ふと同様である。

此の類の祈禱を慣れるまで練習するが宜い、此の祈禱は到る所に、我等の手許に在る武器なる事は、經驗で知れるやうに成るであらう、之れを大切にするべき事、及び之れに由つて得る所の利益は、到底陳盡されぬ程である。

第四十六章 黙想のやうに爲る祈禱

或る一定の時間、例令ば半時間とか一時間とか、  
 又た其餘にも、祈らんとする時には、耶蘇基督  
 の御生涯御苦難に關する、何歟、の事項の黙想を、  
 祈禱に添ゆるが宜い、其の時は現に是れを求めん  
 とする徳に、當嵌めるやうに、注意せねばならぬ、  
 例令ば目下我等が、堪忍の徳を求め度と假定すれ  
 ば、此の時には主の鞭たれたまひし立義に就て、

黙想すれば宜い。

第一にはピラトの命の下つた後、我が主は惡黨  
 の叫聲や嘲笑の中に、如何にして鞭撻の場所まで、  
 曳かれ行きたたまふたかを考へよ。

第二には一時も容赦せぬ憤怒を以て、如何様に  
 して其の衣を剝がれ、又た最と潔き其の聖體が、如  
 何様にして肌を晒されたまふたかを考へよ。

第三には罪なき其の聖手が、如何に殘酷なる繩

目に逢ひたまふたか、又た如何に嚴く柱に縛られ  
たまふたかを考へよ。

第四には其の全身が、如何に鞭を以て傷けられ、  
破られたか、又た其の聖血が、如何に淋漓と流れ  
て、地にまで達したかを考へよ。

第五には雨霰の降るが如くに鞭たれ、其れに由  
つて生じた疵が、如何様にして益す廣がつたかを  
考へよ。

堪忍の徳を得んが爲めに、此等の事を觀念する  
に決て後、我が鍾愛救主が其の尊き體中、又  
た其の各部分に受けて忍びたまふた苦痛を、自ら  
五官を以て出来る丈け激く、感じるやうに爲ねば  
ならぬ。

次に主の至聖なる靈魂に移つて、其の御靈魂が、  
此等の苦痛の凡てを忍ばれた時の堪忍と柔和と  
を、出来る丈け我が心に徹底らさねばならぬ、主

は聖父の光榮の爲め、又た我等の爲めに、數倍大に數倍激き苦痛を堪忍ばんとの御望であつて、之れを満たしたまふ事なかつたのである。

尙ほ其の上に主は我等が困難を甘んじつゝあるを見るの、切なる望に燃えてお出あそばす事を考がへるが宜い、又た主は天に在す聖父に向ひ、現在の十字架と、後に來らんとする十字架とを、悉く堪忍して忍ぶべき聖寵を、我等に與へたまはん

事を、我等の爲めに如何に祈つて下さるか考へねばならぬ。

而後何事にも堪忍して、忍ぶ決心を數回立直し、我等の精神を天に在す聖父に上げ、第一聖父が其の獨子を世に降して、斯の如き慘酷なる苦を忍ばせ、我等の爲めに斯まで熱心なる祈禱を爲さしめたまふた慈愛を感謝し而して終局を附けるには、其の聖子の事業と祈禱との功德を以て、堪忍の徳

を願はねばならぬ。

第四十七章 黙想のやうにする祈禱の別法

又た他の方法を以て祈禱を爲し、且つ黙想する事が出来る、即ち救主の苦難を能く注意して考へ、又た救主が自ら求めて、喜んで之れに服したまふた事を、心の底より黙想した後、其の苦痛の烈しきと、其の温和なる耐忍とより移つて、他に最う二個の觀念を爲るが宜い、第一は其の功力の觀念、

第二は神の子が受難の苦痛に於て、天に在す聖父に表したまふた完全なる服従を以て、聖父に歸したる満足と光榮との觀念である。

此の二個の觀念を神の威稜に差上げ、其の功德によつて、我等の望む所の恩寵を願はねばならぬ。

且つ此の方法は、常に救主の受難の、各立義を黙想する時に、用ひられるのみならず、其の各立

義に於て、耶蘇基督の従事したまふた各内外の行為を、黙想するにも用ひられるのである。

第四十八章 聖母瑪理亞の轉達を以て祈る法

前に述べた種々の黙想や祈禱の方法の外に、聖母瑪理亞の轉達を以て祈る方法がある、是れが爲めには第一精神を永遠の聖父に差向け、次に溫良の耶蘇、終に至榮の聖母に向はねばならぬ。

我等の思考を天主聖父に當嵌て、二個の事を思

考る、即ち第一に神は始なきより、瑪理亞の未だ世に出でざる前より、之れを觀望して喜びたまふた事、第二に瑪理亞が神より世に遣はされた後、行はれた善徳、及び行爲の事である。

前者の神が喜びたまふた事に就ては、何う黙想するかと云ふに、先づ思念を凡ての時代と、凡ての被造物との上に揚げて、神の始なき所、及び神の聖意までに立至り、神が瑪理亞に就て喜びたま



ふた事を考へ。神の聖意を察して後、瑪理亞に就て喜びたまふた事に對して、信賴を以て、敵、就中現に戦ひつゝある敵に、打勝つ恩寵と力とを願はねばならぬ。

次に聖母瑪理亞の秀たる奇妙なる善徳、及び行為の觀念に移りて、或は其の徳行を一緒に、或は一個づゝ天に在す聖父に示し、其の功力によつて、仁慈なる神に凡て我等の需用のものを賜はらん事を願はねばならぬ。

第一に斯く爲して後、我等の精神を天主聖子に上げて、九箇月間之れを孕し居られた童貞なる胎内を始め、之れを拜んで居られた聖母瑪理亞の尊敬、及び其の生れたまふや直に、之れを人として、神として、子として、造物主として認められたる尊敬を追想せしめ、其の貧き状態を愛憐ふかき目を以て眺められた事、腕を以て抱き申した事、接

吻くちして暖あたため申まをした事こと、乳ちを以もつて養やしなひ申まをした事こと、死しに至いたるまで一生いっしやう聖おん子の爲ためめに、受うけられた苦く痛つう疲ひ勞らう等を、聖おん子こに追つひ懐くわせしめ、此これ等らの紀き念ねんを以もつて、聞き届とどけ下くださるやうに切しきりに祈いのらねばならぬ。

終ついに聖せい母ぼに向むかひ、始はじめなきより神かみの攝せつ理りと仁じん愛あいとによつて撰せんれ、恩おん寵ちやうと愛あい憐れんとの母はに立たたれ、我われ等らの轉と達つぎ者しやとせられし事ことを、覺おぼえしめるのである。之これに由よつて聖おん子この次つぎには、聖せい母ぼ瑪ま理り亞やの深ふかき慈じ

悲ひの外ほか、確たしかにして力ちからのある依より頼たのみ所どころはない。

尙なほほ又またた其そのの仁じん愛あいに就つて記しるされた所ところ、斯かくも珍めづらしき結けつ果くわを以もつて經けい験けんの證しやう明めいした所ところ、即すなはち何なに人びとも其そのの有いう力りよくの守しゆ護ごを祈いの求もとめて、聞き届とどけられぬ事ことの會あひてなかつたのを想おもひださしめるのである。

終ついに其そのの獨ひとりの聖おん子こが、我われ等らの救たす靈かりの爲ために凌しのぎたまふた苦く痛つうを想おもひださしめ、聖おん子この傍そばに於おいて我われ等らに惠めぐみを得えさせ、其そのの光こう榮えいの爲ために、又またた聖み意ころに適かな

ふ爲めに、御苦の目的なる救靈の好果を、生じた  
まはらん事を願はねばならぬ。

第四十九章 聖母瑪理亞に依頼すべき信仰と

信頼との理由を説明する觀念

若し我等が入用の時に信頼と信仰とを以て、聖  
母瑪理亞に依頼しやうと思ふたならば左の觀念が  
餘程補助になるであらう。

第一に凡ての人は經驗で知つて居るが、麝香と

か又は何かの香物を入れた器は、其の香物が無  
くなつても、尙ほ幾分か其の香氣が残る、而て此  
の香氣は、香物が長く入れてあつた程、好く保た  
れるので、若し香物が些細でも残つて居れば、尙  
更の事である、然れども麝香や他の香物の力は限  
がある、又た人が大火に近いた時には之れに遠か  
つた後も、暫く暖さを保つて居ると云ふ事は、分  
り切れた話である。

然らば聖母瑪理亞の心は、如何ほど愛熱、哀憐、慈愛の情に溢れ、且つ燃えて居る筈であるか、何故なれば瑪理亞は九箇月間童貞至潔なる胎内に、神の聖子、即ち熱愛、哀憐、慈愛其物なる御方、限もなき徳のある御方を孕し、尚ほ之れを其の心、其の愛に抱きつゝ居られるのであるから。

大なる火に近く者が、暖さを感じる如く、否な夫より尚ほ幾層倍も、入用に迫れるものが、瑪理

亞の心に絶えず燃え上る所の熱愛、哀憐、慈愛の寵に、謙遜と信頼とを以て近寄れば、必ず之れに含める扶助と恩恵と聖寵とを載くに相違ない、此等の思寵は、之れを願ふ念の切なる程、又た其の信頼と信仰との大なる程、得る所も豊になるのである。

第二聖母程耶蘇基督を深く愛し、又た其の聖意に適ふ者は、被造物の中には一つもない。

神の聖子は我等の罪を購ふ爲め、御一生と御自分とを、残らず犠牲に供したまひ、其の聖母をも我等に與へて、我等の母、我等の轉達者、守護者と爲し、聖子の次に、我等の救靈の機關となるやうに、爲て下さつたのである、果して然らば此の母、此の轉達者が、我等を顧ずして、其の聖子の我等に對する聖意に、應じぬやうな事があらうか。

隨て如何なる必要ある場合にも、信賴を以て我等の至聖なる母童貞瑪理亞に依賴せねばならぬ。實に是れこそ幸福にして、豊饒なる信賴である、聖母は凡ての恩寵と慈悲との盡きざる泉であるから、之れに依賴む事は寔に確である。

第五十章 諸天使及び諸聖人の取次を以て

黙想し且つ祈禱する方法。

祈禱の時に、諸天使及び諸聖人の保護と恩恵と

を利用する爲めに、左の二個の勤を守るのが宜い。

第一我等の精神を、永遠の父に上げ、之れに天

使聖人より受けたまふ愛情、賞讃、光榮を捧げ、

又た諸聖人が地上に於て、神を愛する爲めに忍ば

れた、困難苦痛を捧げ、此等の功德を以て、神の

威稜に祈り、我等に缺けてある所のものを、與へ

て下さるやうに、願はねばならぬ。

第二光榮を蒙られたる諸天使諸聖人に向て、我

等の徳に達し、而も完徳の頂上に達せん事を欲す

るものなれば、我等の敵、及び我等の缺點に對す

る扶助を仰ぎ、就中臨終の時に、我等を護つて

下さるやうに、祈らねばならぬ。

或る時は又た聖人が、最上至尊の神より受けら

れた、特別にして豊饒なる恩寵を考へて、此の珍

しき賜に就き、非常なる愛情と歡喜とを起し、

恰も自己に與へられた如く、嬉しがらねばなら

ぬ。

成るべく何所までも私の念を去て、聖人が自己よりも多く恵まれたのは、神の思召であるから之れを喜び、神に對して之れに相當の賞讃と感謝とを表さねばならぬ、此の勤を一層容易く行ふ爲め順序を立て左の通り、一周間の日によつて、天使聖人の組を分けても宜い。日曜日には九隊の天使、月曜日には洗者聖若翰、火曜日には聖祖、及び預

言者、水曜日には使徒、木曜日には殉教者、金曜日には司教、公奉者、及び其の他の聖人、土曜日には童貞、及び其の他の聖女を敬ふ事。併しながら一日に時々、諸聖人の元后なる聖母瑪理亞、我等の守護の天使、大天使聖ミカエル、及び我等の凡ての保護なる聖人に、祈らずして一日も過してはならぬ。

又た毎日聖母瑪理亞、其の聖子、及び永遠の父

に祈り、尊き童貞の淨配なる聖若瑟を、守護、及び主なる取次者として、我等に與へて下さるやうに願ひ、夫れから信賴を以て之れに依頼み、我等を其の尊き保護の下に、置く事を、願ふが宜い。此の光榮なる聖若瑟に就ては、種々珍しい話があつて、深き信心を以て之れに依頼したものは、其の精神上の需用に於ても、亦た現世の必要に於ても、就中祈禱、及び默想に於て、其の取次を以

て、夥しく大なる恩恵を求め得たのである。神が之れに盡すべき眼従と尊敬とを生涯竭した聖人達の勳功を、斯くまで報ひたまふなれば、其の謙遜の深かりし程、其の光榮の大なる聖若瑟を、如何ほど尊重したまふかは、自ら地上に於て之れを父とし、之れに歸服し、之れに仕へ、之れに従ふ程に迄、尊重し給ひしを以て知るべきである、今や神の尊前に於て、聖若瑟の取次の價値は、幾



干なる筈であるか。

第五十一章 愛の種々の感情を惹起すが爲めに、耶蘇基督の苦難に就て爲し得る黙想。

救主の苦難に就て、前に述べた事は、祈禱、及び黙想にも、之れを願の體裁に爲る時は、利用する事が出来るが、茲に之れを以て、愛の種々の感情を惹起す事の出来る方法を述べやう。

假令ば耶蘇基督が、十字架に釘けられたまふた事に就て、黙想する時には、種々の觀念の中に、殊に爲し得べきものを示さう。

第一、惡黨共は、如何にして救主より、其の衣裳を酷く剥取つたか、又た其の聖肉が打たれたまふた爲めに、切裂けたる衣裳に附着して居つたから、如何にして裂爛れたかと云ふ事を考へよ。

第二、如何にして其の茨の冠を引拔て、復た再

び之れを被らせ、其の聖頭に新き傷を附けたかを考へよ。

第三、十字架の上に於て、聖手足に釘を打込んだ、慘酷なる鐵槌の音が、正に我が心に響く如く考へよ。

第四、聖體の筋が痙攣て、之れを磔ける爲めに、十字架に開けられた穴まで届かねば、惡黨共が酷く之れを引張たので、骨が殆ど離れるやうに成り、

一々數へられる程になつた事を考へよ。

第五、救主が十字架の荒木に磔けられ、釣られて之れを支ふる爲めに、釘より外には何もなかつたから、聖體が其の重さによつて下り、夫れが爲めに傷が廣がつて、得も云はれぬ苦を、覺えたまふた事を考へよ。

此等の考を以て、我等の心に愛の情を惹起す爲めには、主の我等に對する限なき御慈悲と、我

等の救靈の爲めに、斯く慘酷なる苦みを忍ばしめたる寵との念を、益す深く我が身に浸込ませるやうに爲ねばならぬ。此の耶蘇基督の御慈悲と寵とを辨へる程、熱愛を以て燃るに相違ない。

耶蘇基督が我等に表したまふた限なき御慈悲と寵とを辨ふれば、後悔と悲哀との情を起し易い、是は我等を罪より救はん爲めに、斯く夥敷虐待、斯く慘酷なる苦みを厭ひたまはざりし神に

度々、又た其の恩を忘れて反いた事を思へば、悲まずは居られぬからである。

次に斯く大なる神が、斯くまで謙り又た非常の困難を嘗め、罪を亡し、我等を悪魔の囚、及び既に我等を壓し居る罪過を取除き、天に在す聖父の尊前に恵を得させ、凡て入用の時、大なる信頼を以て之れに頼む事を、我等に勧めんとしたまふた事を考へ、希望を以て心を引立ねばならぬ。

此の受難の苦痛の黙想から、之れより生じた効  
 果の黙想に移つて、我等は非常の歡喜を感ずるに  
 至るに相違ない。此の受難は全世界を罪より清め  
 て、父なる神の怒を鎮め、惡魔を辱め、死を無に  
 歸し、反逆の天使の爲めに生じた天國の空席へ人  
 を上げて、之れを補ひたまふのであるから、喜ば  
 ねばならぬ。

又た至聖なる三位一神、童貞なる瑪理亞、及び

凱戰教會、戰闘教會の覺え得た歡喜を以て、自分  
 も欣ばねばならぬ。

尙ほ一層罪を憎む念を起す爲めには、前に述べ  
 た觀念を應用して、救主の受難の主なる目的は、  
 我等に惡き傾向を憎ませ、殊に其の第一激きもの、  
 第一神の聖意に適はぬ傾向を専ら憎ませる爲めで  
 あると、考へねばならぬ。

我等が左の事を考ふれば、驚くに相違ない。世

界の造物主、萬物の生命の根元たるものが、被造物の手によつて、死するまで苦しめられ、此の上なき威稜の御方が、卑しめられて足に踏付けられ、正義は罪せられ、神の美德は輕んぜられ、天の父の寵みなる御獨子は、憎まれるものとなり、永遠にして近くべからざる光明が、暗黒の力に任せられ、限もなき光榮と幸福とに極るものが、人の憎み嫌ひ辱しむるものとなつて、甚しき困難の極り

に落入たとは、是れより奇妙な、不思議な事が想像せられやうか。

受難に於る救主に對して、勉る心を惹起す爲めには、其の御體の苦難を考ふるに止まらず、思を回らして、其の尊き靈魂を裂苦めた所の、比べられぬ程に尖き御心痛までに、立至らねばならぬ。若しも御體の苦を勉る心を惹起すならば、御心痛は我等の心を打毀かずに居られやうか。

耶蘇の尊き靈魂が、受難に於て神の本性を見るのは、今や之れを天に於て見るが如くであつた、夫れで限もなく尊崇と拜禮とを受くべきものたる事を知るによつて、得も云はれぬ程に之れを愛し、且つ萬物が力を盡して、神の威稜に仕へ奉らん事の望を以て、燃えて居つたのである。

然るに却て神の威稜は世人の無数の罪、及び甚しく憎むべき過失を以て、斯くまで傷けられ且つ

輕蔑せられたるを見ては、基督の尊き靈魂は、一遍に激き萬苦を以て、突徹されて居つた。又た此の苦が基督の靈魂を責むる激しき事は、神の尊嚴が適當に尊敬せられ奉仕せられる事を、好み望む念の激く、且つ熱誠なる程であつた。

且つ又た誰も此の好と望との熱誠の程を覺る事あたはざる如く、誰も十字架に付けられたまふた救主の靈魂が、中心に感じた所の苦痛が、如何は

ど酷く激しかつたかを解する事は、到底出来ぬのである。

尙は又た神たる救主は、萬民を云ふに云はれぬ程、愛したまふにより、人々の自分を離れる原因と成る罪を、深く悲みたまふたのは、其の愛の熱誠なる程であつた、何故なれば現在將來の人々が、大罪を犯し、或は犯さんとする度毎に、其の靈魂は、曾て愛徳の繋ぎによつて、主の尊き靈魂と結

合されてあるのに、之れを離れ、或は離るべきに決るからである。

斯く引離されるのは、身體四肢の引離されるよりは、千萬倍も苦い事である。何故なれば靈魂は無形であるから、肉體よりは高崇にして、且つ完全なものである、隨て肉體よりも遙に深く苦痛を感じ易いからである、救主が人々に就て、忍びたまふた心痛の中に、最も酷いものは、確に地獄に

亡びた靈魂の罪の爲めに、忍びたまふた心痛に相違ない、何故なれば最早彼等は、再び自分と一致する事が出来ずして、永遠に譬やうもなき苦に處せられたものであると云ふ事を、覽そなはしたからである。

若し人が至愛なる耶蘇の愛に感じた、敬虔の考を益す深く繼けて行くなれば、尙ほ同情を起すべき所のものを、見出すであらう。即ち耶蘇が慘酷

なる苦を忍びたまふたのは、唯だ既に犯した罪の爲めばかりでなく、未だ犯さずして、犯す筈の罪の爲めにも、忍びたまふたのである、既に犯した罪の赦されたのも、犯す筈の罪の免かれるのも、是れ皆な我が救主の苦難に歸すべき事に相違ない。

我等が十字架に付けられたまふた耶蘇の苦難を、劬り度と思ふならば、他に尙ほ觀念すべき題



となるものが多い。

既往にも將來にも、人間に有りとあらゆる苦の中うちに、基督きりすとの感かんじたまはぬものはない。

侮蔑あなざり、誘惑いざない、汚辱はづかしめ、難行なんげふ、憂愁うれひ、苦くるしみ、凡すべて全世

界かいに有ありとあらゆるものは、人ひとの受うけたよりも、

基督きりすとの靈魂れいこんは尙なほ之これに苦くるしみみたまふたのである。

人々ひとぐの忍しのぶ所ところの、靈魂れいこん上じやう肉身にくしん上じやうの凡すべての苦痛くつうは、些さ細さいな頭痛づつうや、荆さげに刺さされた如ごとき苦痛くつうに至いたる

まで、耶蘇せや基督きりすとは之これに感かんじ、又また廣大くわうだい無邊むへんの愛あい徳とくによつて、之これに同情どうじやうし、愛憐あいれんの深ふかき聖意みことろに之これを銘刻きざりたまふたのである。

加くはふるに誰たれも覺さり得ねられぬのは、其その至聖しせいなる母ははの苦痛くつうを見みて、感かんじたまふた心痛しんつうである。亦また凡すべて救主すくひぬしの忍しのびたまふた體からだと心こころとの苦痛くつうは、聖母せいぼの心こころにも感かんじたのである。勿論もちろん苦痛くつうの度さは違ちがふけれども、其その心痛しんつうの甚はなはだし事ことは疑うたひない。

所ところが聖母せいぼの此この苦痛くつうは、聖子おんこが既にすでに忍しのびつゝあつた苦痛くつうの上に重かさなつて來きて、恰ちやうど火ひの箭やの如ごとく、其そのの聖意みこころを刺通さしとおしたのである。又またた實際じつさい此等これらの苦痛くつう、其そのの他たに尙なほ我等われらの知しらぬ多おほくの苦痛くつうが一時いちじに、神聖しんせいなる御心みこころの上うへに落おちて來きたのである。或あるる信しん心じんな人ひとが正直しょうじきに申まをした通とほり、畏おそれながら實じつに之これは愛あいによつて、自みづから好このんで造つくりたまふた地獄ぢごくのやうなものであつた。

結局つまり我等われらの救主すくひぬし、購主あがなひぬしが十字架じじかに釘つけられて忍しのんで下くださつた凡すべての苦痛くつうの原因げんいんは、唯ただた罪つみの外ほかには見出みいだされぬのである。夫それ政ゆゑに結局けつぎよく、耶蘇ぜす基督きりすとが我等われらに要求ねうきやうしたまひ、又またた我等われらが早はやく基督きりすとに呈ていすべき、同情どうじやう、感謝かんしゃ専もつら其そのの愛あいを輕かろんじて、之これに背そむいた事ことを、眞實しんじつに悔くやむにあるべき事ことである。次つぎに我等われらの決けつすべきは、罪つみを此この上うへもなく憎にくみ嫌きらふて、凡すべての敵てきと惡あしき傾かた

向<sup>むか</sup>とに、勇<sup>いさ</sup>ましく戦<sup>たたか</sup>ふべき事<sup>こと</sup>である。終<sup>ついに</sup>に奮<sup>ふる</sup>き人<sup>ひと</sup>と其<sup>その</sup>の業<sup>わざ</sup>とを脱<sup>ぬき</sup>棄<sup>す</sup>て、後<sup>のち</sup>、新<sup>あたらし</sup>き人<sup>ひと</sup>を着<sup>ちやく</sup>し、福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>的<sup>てき</sup>徳<sup>とく</sup>を以<sup>もつ</sup>て、之<sup>これ</sup>れを飾<sup>かざ</sup>るやうに力<sup>つと</sup>むべき事<sup>こと</sup>である。

第五<sup>だい</sup>十二<sup>じふに</sup>章<sup>しょう</sup> 十<sup>じふ</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>に釘<sup>くわい</sup>けられたまふた耶<sup>ぜ</sup>

蘇<sup>すい</sup>を黙<sup>もく</sup>想<sup>さう</sup>し、其<sup>その</sup>の徳<sup>とく</sup>に倣<sup>なち</sup>ふより得<sup>う</sup>べき利益<sup>りえき</sup>。

此<sup>こ</sup>の尊<sup>たふと</sup>き黙<sup>もく</sup>想<sup>さう</sup>より得<sup>う</sup>べき種<sup>しゆ</sup>々<sup>とく</sup>の利益<sup>りえき</sup>の中<sup>うち</sup>に、第<sup>だい</sup>

一<sup>いち</sup>のものは、唯<sup>ただ</sup>だ過<sup>くわ</sup>去<sup>こ</sup>の罪<sup>つみ</sup>を悔<sup>くわ</sup>むばかりでなく、終<sup>しじゆう</sup>始<sup>わ</sup>我等<sup>われら</sup>の中<sup>うち</sup>に活<sup>い</sup>きて居<sup>お</sup>つて、我<sup>わ</sup>が救<sup>すく</sup>主<sup>ひぬし</sup>の受<sup>じゆ</sup>難<sup>なん</sup>の

原因<sup>げんいん</sup>となつた亂<sup>みだ</sup>れた情<sup>じやう</sup>慾<sup>よく</sup>を、甚<sup>いた</sup>く悔<sup>くわ</sup>む事<sup>こと</sup>が出来る。

第二<sup>だい</sup>の利益<sup>りえき</sup>は神<sup>かみ</sup>に我等<sup>われら</sup>の罪<sup>つみ</sup>科<sup>が</sup>の赦<sup>ゆるし</sup>を求<sup>もと</sup>むると共<sup>とも</sup>

に、自<sup>おの</sup>己<sup>れ</sup>を捨<sup>す</sup>て、以<sup>い</sup>後<sup>ご</sup>は天<sup>てん</sup>主<sup>しゆ</sup>に背<sup>そむ</sup>かれぬと云<sup>い</sup>ふ

程<sup>ほど</sup>に、自<sup>おの</sup>己<sup>れ</sup>を憎<sup>にく</sup>む惠<sup>めぐみ</sup>を専<sup>もつ</sup>ら願<sup>ねが</sup>ふのみならず、却<sup>かへ</sup>つ

主<sup>しゆ</sup>が我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の爲<sup>た</sup>めに凌<sup>しの</sup>ぎたまふた凡<sup>すべ</sup>ての事<sup>こと</sup>の感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>と

して、此<sup>こ</sup>の後<sup>のち</sup>は一<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>に主<sup>しゆ</sup>を愛<sup>あい</sup>し、完<sup>くわん</sup>全<sup>ぜん</sup>に事<sup>こと</sup>へん爲<sup>た</sup>め

の惠<sup>めぐみ</sup>を、切<sup>せつ</sup>に願<sup>ねが</sup>ふ機<sup>き</sup>會<sup>わい</sup>となる事<sup>こと</sup>である。若<sup>も</sup>し我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>

が斯<sup>かく</sup>まで自<sup>おの</sup>己<sup>れ</sup>を憎<sup>にく</sup>まぬならば斯<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>く天<sup>てん</sup>主<sup>しゆ</sup>を愛<sup>あい</sup>し

て完全に事へ奉る事は迎も出来ぬ。

此の黙想の第三の利益は、我等に敵對する凡ての悪き傾向を、打亡す方法を呈する事である。

第四の利益は我等が出来る丈け、我が救主の徳に倣はんと力むるを得る事である、救主は常に我等の罪を購ひ、我等を救出す爲めに苦むのみを以て、足れりとしたまはず、尙ほ我等が其の跡を慕ふべき手本をも、我等に遺さんと志したまふた

のである。

序に此の目的を遂ぐる爲めに、極めて有益な觀想の方法を示して置き度い。

目下我等が耶蘇基督に倣ふて、耐忍を求むる爲めに勤めて居ると假定すれば、左の事柄を考へるが宜い。

第一十字架に釘けられたる基督の靈魂は、神に關して何を爲したまふかと云ふ事。

第二神は基督の靈魂に何を爲したまふか。

第三救主の靈魂が自己に就て、又た其の至聖なる身體に關して、何を爲したまふか。

第四耶蘇基督は我等の爲めに何を爲したまふか。

第五我等は耶蘇基督に對して、何を爲すべきかと云ふ事。

先づ耶蘇基督の靈魂は、神に關して何を爲した

まふかと云ふに、其の靈魂は神の量るべからざる、限なき大なる注意を盡し、此の大なる神の尊前に在りては、萬物悉皆虛無の如きに過ぎず、神は極りなき光榮にありて、變る事なきものなるにも拘らず、地上に於ては人間から非道の虐待を受けたまひ、人間は之れに對して、不忠と侮蔑を加へて居るのを覽をなはし、非常に驚愕、拜禮と感謝とに耐えずして、自己を全く捧げ盡したまふ

事を考へよ。

第二神は基督の靈魂に何を爲したまふかと云ふに、神は基督の靈魂に手で打たれ、鞭たれ、唾を吐掛けられ、罵られ、荊に刺され、十字架に釘けられるを、我等の爲めに甘んじて忍ばん事を、勧めたまふのである。神は基督の靈魂を、之れに服せしむるを望み、斯く苦痛と侮蔑とに飽かされるを以て、如何に聖意に適ふかを示したまふのである。

事を考へよ。

第三救主の靈魂が己れに就ての覺悟を考へて見よ、光明きわまる基督の智識は、己が苦によつて天主聖父の聖意の、此の上もなく満足したまふを覽そなはし、愛寵きわまる基督の聖意は、神の威稜の限なき功德と、之れに對する己が廣大なる義務とを認め、夫れ故に深き愛情を以て、之れに愛着して居たまふのである。基督の靈魂は人を愛

し、人の手本となる爲めに、苦を忍ぶ事を勧められて喜び勇んで、速に聖父の聖意に従はんと、覺悟したまふのである。

此の上、潔白にして愛情に満る此の尊き靈魂の深き望の程を、誰が測り知る事が出来やうか。苦痛の深き淵に引入られつゝあるが如くであつて、而も益す苦を探求めながら、欲する程に苦を忍ぶ、道を認め得ぬ如き状態である。乃で自ら好

んで己れを犠牲に供し、有て居る物を悉く捧げて罪なき己が五體を、怒り狂へる悪黨共と、悪魔等との勝手に打任せ、彼等の爲るが儘にして置きたまふ事を考へよ。

第四教主が我等に向て、愛憐の皆を垂れ、斯く語りたまひつゝあるを眺めよ、「我が子よ、汝が己れに克つ事を否み、望を濫用したるにより、我れを如何なる目に逢せしかを看よ。我れ汝に耐忍

の鑑かみを示しさん爲ために、如何いかほど喜よろこんで苦くるしんだかを  
見みよ。我わが子こよ、我わが凡すべての苦くるしみに對たいして、何卒さうぞ、  
我わが汝なんぢに遣つかはさんと欲ほつする凡すべての十字架じかを甘あまじて  
忍しのべよ、如何いかほど名譽めいよに觸さわると思おもふとも、如何いかほ  
ど身しん體たいに苦くるしく思おもふとも、我わが汝なんぢを試ためさしめんとする  
所ところの、迫害者はくがいしやの手に任まかせよ。嗚呼あゝ、若もし汝なんぢが、  
之これに由よりて、我わが心こころに得うべき慰なぐさめの程ほどを知しれば  
宜よいが。然しかし之これを察さつする事ことを得うべし、即すなはち我わが

全身ぜんしんの、傷きつだらけなるを看みよ。我われは之これを珍めづら  
き進物しんぶつの如ごとくに受うけんと欲ほつしたり、是これ想像さうぞうされ  
ぬほど我わが愛あいする所ところの汝なんぢの靈魂れいこんをば、貴重きちゆうの徳とくを  
以もつて飾かざらん爲ためである。嗚呼あゝ、我われは斯かる意こころを以もつ  
て、斯かくまで盡つくせしに、我わが愛あいする所ところの汝なんぢの靈魂れいこん  
は、我わが意こころに適かなふべく、汝なんぢの不堪忍かんにんの爲ために我われ  
の受うけたる傷きずを輕かくすべく、其その不堪忍かんにんは我われに  
取とりて、傷きずよりも尙なほ一層そう苦くるしかるに、争いで聊いさか



でも苦みを厭ふべきや」と、己れに云はるゝが如く考へよ。

第五我等に斯く語る者は誰であるかを考へ見よ、此は之れ光榮の王にして、眞の神、眞の人なる耶蘇基督である。其の忍びたまふた苦の殘酷なると、其の飽かされたまふた侮蔑の辱しめの程とを考へよ。世の最も凶惡なる盜賊に取りてさへも、餘りではあるまいかと思はれる程である。然

るに斯の如き侮蔑の中に在て、我が教主は何様であるかと見るに、啻に耐忍を以て甘んじて之れを受けたまふのみならず、宛も祭日の歡樂の如くに思ふて、之れを喜びたまふのである。又た烈しき火の上に少しの水を注げば、却て其の火の勢を増すのみなるが如く、基督の苦は如何程あるも、其の愛熱に比しては尙ほ足らずとの思召にて、其の苦が増すに従つて、矢張耶蘇基督に歡喜と、

尙ほ苦み度との望とが増すものであつた。又た救主が斯る苦を忍びたまふたのは、無理に強いられたのでもなければ、御自分の利益の爲めでもないといふ事を考へて見よ。自ら我等に仰せられた如く、是れ皆な我等を愛したまふ爲め、我等に其の手本によつて、耐忍の徳を倣はしめんが爲めである。次に救主が我等に求めたまふ事と、我等が耐忍を行へば、救主の聖意を喜ばせる事との念を、

身に染込ませて、堅き決心を爲し、唯だ耐忍を以てのみならず、歡喜を以て現在の十字架、及び將來も聖意によつて來らんとする凡ての十字架を如何ほど重くとも忍ばうと決めねばならぬ。又た此の決心を爲るのも、我が神の跡を慕ふ爲め、我等の力の及ぶ丈け、神に大なる御喜悅を供へん爲めに爲ねばならぬ。

耶蘇基督の上に落ちて來た汚辱と苦痛とを、心の

中に思ひ遣り、尙ほ基督が如何ほど耐忍して、且つ安んじて、之れを忍びたまふたかと考へよ、然すれば我等は耻かしながら、斯く自白せねばならぬであらう。即ち我等の忍耐は、基督の夫れに比ぶれば、聊の影のみに過ぎぬ。又た我等の苦痛と汚辱なども、然う名くるに足らぬものであると辨へよ。我等は主が其の愛の爲めに、我等に凌ぐ事を求めたまふ苦痛に對して、少しでも厭氣を起す

事を、恐れ慄かねばならぬ。

十字架に釘けられたる救主は、我等の目前に備へ在る書物のやうなものである。我等が之れを讀めば、萬の徳の眞正なる模範を認むるであらう。是れは生命の書物であつて、之れに含める語を以て、智識を照らすばかりでなく、活ける手本を示して、意志をも燃すのである。世に書物は澤山あるけれども、夫れの凡てを集めても、十字架に釘

けられたる救主を眺める一の觀念ほど、萬の徳を  
 求むるに、完全な教を垂れる事は出来ぬであら  
 う。

數時間も救主の受難を泣き悲んで、其の忍耐を觀  
 念する人がある。然れども一朝困難が起れば、忽  
 ち其の短氣な事は、恰も默想の中に、何も學ばざ  
 るが如し、斯る人は之れを譬ふるに、宛ど戦争の  
 前に帷幕の中で、豪さうな事をして見せると力ん

だ軍人のやうなものである。將ざ敵が顯れたとな  
 るや直に、武器を棄て、逃げてしまふ。嗚呼救主  
 の徳を明な鏡の中に於ける如くに眺めつゝ、之  
 れを愛し、之れを感心しながら、實行する機會が  
 来るや直に、全く之れを打忘れるのみならず、之  
 れを否むに至る人の舉動は、何よりも愚にして、  
 何よりも嘆かほしき事ではないか。

第五十三章 聖體の秘蹟

是れ迄は敵に勝つが爲めに、必要なる四個の主なる武器を持たせて、之れを能く用ふる事を學ぶに、大切なる教訓を與へたが、尙ほ一つ故と残したものがあつた、夫れは聖體の秘蹟である。

此の神聖な秘蹟は、他の六個の秘蹟の上に位して居るが如く、此の第五番目の武器として、他の四個の武器よりは、遙に優る力のあるものである。

前に述べた四個の武器は、耶蘇基督が其の聖血を以て、我等の爲めに求めて下さつた聖寵によつて、其の勢力を得るのであるが、今や茲に云ふ所の武器は、耶蘇基督の御肉身、御血、御靈魂であつた、全く神性其物である。

前の四個の武器では、人が耶蘇基督の扶助によつて敵と戦ふのであるが、第五番目の武器では、耶蘇基督が自ら、我等と共に戦ひたまふのである。

何故なれば御約束の如く、耶蘇基督の肉を食し、其の血を飲む者は、耶蘇基督に住み、耶蘇基督も亦た、其の者に住みたまふのであるから。

此の秘蹟、此の武器は、之れを用ゆるに二の道がある。一は秘蹟的にして一日に一度、他の一は精神的にして時々刻々用ゆる事が出来る。故に之れを忽諸にしてはならぬ。精神的には數次、秘蹟的には出来る丈け度々、之れを用ひねばならぬ。

### 第五十四章 聖體の秘蹟を拜領する法

聖體の秘蹟を領くる時には、種々の目的を立てる事が出来るが、之れに達するには、種々の行ふべき事がある。之れを三つに分けて、拜領前、拜領中、拜領後とする事が出来る。

如何なる目的を以てするにも、拜領前には先づ悔悛の秘蹟を以て、我等の心を大罪の汚穢より浄めねばならぬ。次に心の愛情を盡し、靈魂を盡

し、凡ての能力を盡して、耶蘇基督、及び凡て其の聖意に適ふ事に、自己を全く委ねばならぬ。是れは實に道理な事である。何故なれば基督自己も、神聖なる秘蹟の中に、其の御肉身、御血、御靈魂、其の神性、及び其の功徳を、悉く我等に與へて下さるからである。終に我等の捧る事は、基督の我等を富したまはる寶に比ぶれば、何でもない、殆ど數ふるに足らぬと云ふ事を考へて、有り

とあらゆる人間、及び天使が、神の威稜に捧げ得る丈の物を残らず持ちて、之れを吝なく捧物にしたいと望まねばならぬ。

假令ば聖體拜領の準備をするのに、救靈の敵に打勝ち、之れを己が身の中に亡したいとの目的を以てすれば、拜領の前日、少くも出来る丈け早く、神の聖子が其の愛の秘蹟を以て、我等の心に入り、我等と一致し、凡ての邪慾を制するに、我等を扶

けんと望みたまふ事を考へよ。

基督の之れを望みたまふ事は、大にして限りなく、如何なる人も之れを測り知る事は出来ぬ程である。

聊でも之れを覺るには、耶蘇基督の聖意に在る二個の感情を、己が身に染込ませねばならぬ。

先づ仁愛の深き神は、我等と共に住むのを、云ふに云はれぬほど、喜びたまふ事である。何故な

れば之れを樂としたまふ事が、聖書に言顯されてあるから。

次に罪を限りなく嫌ひたまふ事である。蓋し神に取りては、罪は深く好みたまふ一致の妨碍にして、又た神性の徳に反するものであり、且つ神は最上の善、清淨の光、無限の美なるに、却て罪は暗黒であり、又た我等の靈魂を汚して、神の目には見るに忍びざるものとするのであるから、争で



神が之れを此の上もなく憎まずに居たまふべき。

神は罪を甚しく嫌ひたまふて、舊約の中にも新約の中にも、殊に聖子の受難に於ける凡ての場合にも、罪を亡さんとしたまふのみであつた。特別神明に照された人々の云ふた語によれば、我等の些細な罪を消すにも、救主は若し必要あらば、千度も死せんと覺悟したまふ程である。

此等の事を考ふれば、假令明瞭とは分らずとも、

耶蘇基督が我等の心に入り、凡て我等の敵を亡し且つ追出さんと望みたまふ事の、如何ほど深きかを、大畧推測する事が出来る。随て我等も亦た基督と同じ意を以て、之れを受ける事を、望むやうになるであらう。

我等が此の大なる志を起し、我等の心が基督の御光來を見んとする望に満される時、我等は打亡さうと思ふ情慾に向て、幾度か戦を挑み、反對

なる徳行を以て、勇ましく之れに當り、聖體拜領の前の夜と、其の翌る朝とに、専ら此の修業を爲ねばならぬ。

次に我等が聖體を拜領する時に當り、其の暫く前に、我等が此の前に拜領して以來、犯した罪科を一寸回顧ねばならぬ。考へて見よ、我等の罪を犯したのは、恰ご神の無かつた如く、神は其の受難の時に、我等の爲めに苦みたまはざりし如くに

して、我等は卑き快樂を、神の光榮よりも重んじ、又た自己の意志を、全知なる神の意志よりも貴んだのであると云ふ事を覺え、自ら耻ぢ、震ひ慄き、我等は恩知らずである、聖體を受くるに足らぬものであると云ふ事を見て、恐れ入らねばならぬのである。

又た其の次に、神の限なき慈愛の測知られぬのは、我等の恩知らずと、信仰に冷淡なる心とを、

振り起さしむる事を考へ、頼もしく思ふて神に近  
き、我等の心を全く之れに委ねて、神にのみ司  
られるやうに爲ねばならぬ。

斯く我等の心を全く委ねるとは、被造物に對す  
る何等かの邪慾を追出し、其の入口を閉めて、救  
主をのみ我の心の唯一の所有者として、仰ぎ奉つ  
る時の事である。

聖體拜領の後には、我れと我が心に潜み入り、第

一恩惠の深き主を拜する爲めに、出来る丈け謙遜  
と尊敬との情を以て、心の中に斯う申上げねばな  
らぬ。

「嗚呼、我が唯一の寶なる主は、我れの如何ほど  
主に背き易きものなるか、又た此の邪慾が我れに  
對して、如何に強きかを覽そなはず、我れ一人で  
は迎も之れを逃れる事あたはざるべし、故に我が  
救主よ、此の戦は眞に主の戦にして、縦や我

れ自ら戦はざるべからずとするも、勝利は主によつてのみ之れを希望す」と。

而后思念を永遠の聖父に上げ、我等が己れに克つた恩謝として、其の聖子、即ち我等に與へたまはり、現に我等の心の中に住みたまふ聖子を、聖父に獻げねばならぬ。又た我等の制しやうと思ふ情慾と、勇ましく戦へば、神は必ず我等に、勝利を待たせて下さると、深く信賴して待たねばならぬ。

ぬ。我等の方で力の及ぶ限り、竭しさをすれば、早晚我等の盡力が、勝利を占める事は確である。

第五十五章 我等が神に對する愛を惹起す爲め如何に聖體拜領に準備すべき乎

聖體の秘蹟を以て、我等が神に對する愛を惹起す爲めには、神が自ら我等に示して下さつた愛を思ひ、前の晩から左の事柄を考へるが宜い。

最大、全能にて在ます神は、我等を御自分に肖